

あ と が き

『カズイスチカ』

私は1981年(昭和56年)に医学校を卒業している。その頃、恩師に勧められてイヴァン・イリイチの『脱病院化社会』を読んだ。それから30年、イリイチの主張はそのまま現代社会に当てはまり、その思想は別にして、経済的理由から在宅医療が推し進められている。結果は同じとして、プロセスの違い・さらなる目標の違いは歴然としている。社会全体がこの人口減少・少子高齢化時代の機軸をどこに据えるのか、経済論議ばかりでなく、日本人の在り方として論議を尽くさねばならない時である。少なくとも医療介護の分野においては、医師会はそのリーダーシップをとるべきである。

そこで今年度の最後に、3つの書籍をご紹介申し上げ、私の任を果たしたい。

開業医、勤務医、ともに働く場は違えども、現代日本に生きる私たち医師は何処から来て何処に向かおうとしているのか？

一つ目は森鷗外著『新潮文庫：山椒大夫・高瀬舟』に収録されている『カズイスチカ』である。花房医学士(森鷗外)とその父(開業医であった鷗外の父)の臨床診断をめぐる物語である。大学出たての若い医学士花房(鷗外)は父の代診をしているときに、父の医学知識は古いと感じていた。ところが数々の臨床例を見事に診断していく様子を父を見直し、医師としての生き様を見出していくのである。今も昔も変わらぬ継承開業医の日常一コマであろう。二つ目は一橋大学猪飼周平氏著『病院の世紀の理論』(有斐閣,2010)。湯布院の旧日野医院が表紙を飾るこの本は、明治の医制公布以来勤務医が最初から身分分離することなく開業医に転身していく様子を社会科学的な手法で紐解いた力作である。この本にもあるように我々日本の医師は歴史的にアメリカ型のキャリア形成を行っており、そうした中であまねくプライマリ・ケア医を社会に広めるためには、現存開業医のプライマリ・ケア研修の充実が最も重要であり、専門プライマリ・ケア医の養成に固執することはミスリーディングであると考えられる。最後にもう一つ『プライマリ・ケアの現場で役立つ一発診断100』(文光堂,2011)。さまざまな状況や行動のパターンを、ごく断片的な観察から読み取って瞬間的かつ無意識のうちに認識する能力(輪切りの力“thin slices”)を「適応的無意識」と呼び、一気に結論に達する脳の働きは、単なる経験や勘あるいは第六感とは違う、進化で獲得した能力であるという。鷗外が父の診療で感じたように、初心とともに研ぎ澄まされた感覚による初診の大切さを論じている。以上近頃読み考えたことを述べてみた。ご興味あらば、ご一読をお勧めする。

(編集委員長：三倉 剛)

あ と が き

ムカデは夏に出てくる虫ですが、当院のある温泉地では地面が温かいため春先から奴らは活動を始めます。なにしろ攻撃的で、誤って触れると容赦なく咬むので油断できません。以前、私が網戸の建て付けを確認していた時のこと、左腕にぼとりと何かが落ちてきたのでひょいと手で払いのけたその一瞬のうちにチクリと咬まれてしまいました。せいぜい5センチほどの小さいムカデでしたが数時間はヒリヒリと痛み、翌朝は腕全体がひどく腫れ上がりました。そういう凶暴な奴らが建物のあちこちに隠れているのです。時には鳥肌が立つほど大型のムカデが診察室の壁に張り付いていることもありました。

そこで奴らの侵入から当院を守るため私は徹底抗戦を決意したのです。ネットで調べると、奴らは肉食性で普段は屋外に生息していますが、しばしば他の虫を追って部屋の中に侵入してくるのだそうです。それで建物の周りを取り囲むように粉状の殺虫剤を散布して侵入を防ぐのが対策の基本です。毎年2~3月頃の奴らが蠢き始める前に一回、さらに夏の盛りに二回目を散布します。この二回攻撃のおかげでずいぶん奴らの進入は減りましたが、完璧とはいかず、未だにゲリラムカデには悩まされています。

このような土地柄のため当院には春先からムカデの被害を受けた外来患者がやって来ます。大抵は抗ヒスタミン薬とステロイドの外用で軽快しますが、まれに全身性の急性アレルギー症状を起こす人もいます。以前、長靴の中にムカデが潜んでいるのを知らず足を咬まれた人が待合室でアナフィラキシーショックを起こし失神するという事がありました。ハチの場合と同様、虫さされといえどあなどれません。それとムカデはハチなどと違って手足の先端付近を咬まれることが多く、数時間で痛みが軽快した後にかなり広い範囲で腫脹する事をあらかじめ説明しておく必要があります。数日間は驚くほど腫れるので、少し大袈裟なくらいに言っておかないと毒が回ったとあわてて夜中に救急車を呼ぶ人がいるからです。

地球環境のために多様な生き物がある事が好ましい、という考えには賛成ですが、あの凶暴なムカデに関しては別です。なんとも虫のいい理屈ですが。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

『ヴァリエーション』

たびたびスマップの唄を引き合いに出して恐縮だが、「世界に一つだけの花」の歌詞にある『小さい花や大きな花 一つとして同じものはないから No.1にならなくてもいいもともと特別な Only one』を日々実感することが多い。医学一般そうであるといえはお仕舞であるが、具体的なエピソードを一つご披露しよう。

脳神経外科診療の第一線にいたころ、神経放射線検査や実際の手術で、頭蓋内血管径（特に前大脳動脈や横・S状静脈洞の径）の左右差をずいぶん気にしていた。理由はそれが手術計画と密接に関連するからである。場合によっては、それら動脈を一時遮断したり、あるいは静脈洞を切断することも有りうる。

一方最近、長期の療養病床に勤務して、中心静脈路を確保する機会が増えた。静脈ルートを末梢で確保できないことが多いからである。その第一選択が内頸静脈穿刺で、エコーガイド下に施行することから、左右の内頸静脈をエコーで確認する機会が増えた。そこで気付いたことは、右内頸静脈が左のそれに比べて圧倒的に太いことが多いという事実である。それはとりもなおさず、脳神経外科診療で見えていた横静脈洞やS状静脈洞の径が圧倒的に右優位であったことと合致する事実である。改めて文献を調べてみると、こうした報告が脳神経外科や麻酔科からなされていた。

われわれは、解剖学の実習で、「variation（変異）」というものがあること（あるいはそれが極端な場合を破格（anomaly）ということ）を学んでいる。知識や手技が画一化されるに従って、この事実がつい疎かになりがちである。ここはひとつ基礎に戻って、こうした事実を目を向けねばならないと思う今日この頃である。

（編集委員長：三倉 剛）

あ と が き

「先生、外来のエアコンが入りません」・・・またかと軽く舌打ちしながらエアコンの表示を見ると見慣れたエアコンガス漏れのサイン。平成9年に設置してもう何回修理したことが。ほぼ年に一回は何処かのエアコンを修理していますが、エアコン業者はいつもこう言うのです「お客さん、温泉地だから仕方がないですよ」と。

先日、全日空の機内誌に別府の鉄輪温泉が取り上げられていて、その写真に湯けむりに囲まれた当院が写っていました。それはいかにものんびりした風情ですが、温泉地にはそれなりの苦労があるのです。以前にも本欄で紹介しましたが、その一つに電気製品が長持ちしないというのがあります。泉源から噴出する硫化水素や水蒸気に含まれるカルシウム成分などが原因なのでしょう。電気製品全般に故障しやすいのですが、特に最近のエアコンはずいぶんひ弱になっているような気がします。構造上外気に触れることが多いのが理由なのか、熱交換器や冷媒ガス配管の接続部分からのガス漏れがほとんどです。

でも新しい物好きの私には、定期的に電気製品が壊れるので新製品を買う良い口実にもなっています。これは別に温泉地だからというわけでもなさそうですが、最近はやたら故障しやすい製品が多くなっているような気がします。それも昔と違って近頃の電子制御の製品は突然プイと反応が無くなってしまふような実に可愛げのない故障をするのです。

少し前までは電気製品が故障すると街の電気屋さんが回路図片手に黙々と修理していました。それはまさに職人の仕事でした。しかし最近の修理と云ったら臓器移植のように重要な部品や基盤類をゴッソリと新品に交換してしまうような何とも素っ気もない修理方法なのです。そんな訳で、私はこんな修理は見るに堪えないので、哀れ電子部品の不調で息絶えた製品は修理などせずさっさと引導を渡して新品に交換することにしています。本当は故障するたびにイライラするので、もはや諦めの境地と言った方が正しいのですが。

先日、震災の被災地気仙沼の開業医の先生が、外来診療施設が津波で水没してしまったけれど、紙カルテであったため判読が可能で診療再開が早く出来たが、電子カルテが水没していたら困っただろうとおっしゃっていました。いくらバックアップをしっかりとしているとはいえ、想定外の事態で一瞬でデータが消滅なんて事はないんでしょうね。電気(電子)製品には散々痛めつけられたせい、私はどうも疑り深いのです。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

今年の九州医師会連合会の諸会議は佐賀市で開かれている。佐賀城の傍が会場である。会議が終わり、愛敬町や白山町あたりに繰り出せば、シャンソンを歌うママや玄人並みに唄のうまい元心臓血管外科医に出くわす。佐賀平野の米は良く、酒も美味しい。こうして暢気に佐賀の夜は更けてゆくのだが、翌朝秋雨に煙る神野(こうの)公園にある人を訪ねた。

その人はおよそ130年前に梟首という時代錯誤の刑罰の末に非業の死を遂げている。司馬遼太郎が『歳月』で「稀代の策士」と呼び、一気に維新の中樞を駆け上がり、それまた一気に転がり落ちている。『九州の精神的風土』(高松光彦著)によれば、佐賀人は分裂気質特有の行動様式を取り、義務の観念がマゾ的に自分自身に厳しく、サド的に他人にも要求する結果、抽象的理想主義論を振り回すが、事が破綻すると極端に悲観に転ずるといふ。その典型が、その人、江藤新平であるといふのだ。

大久保と並び、明治国家の絵を描いたものの、その政争に敗れた結果こうした結末になっただけで、鹿児島で西郷さんの人気が高いように、佐賀では江藤新平の人気は高い。

江藤が捕縛され護送されるときに、書経(五経の一つ)を引用して次のように言ったと伝わる。「人心これ危く、道心これ微なり。故に聖人これを戒めて曰く、『誠にその中をとれ』と、余、この言を思うごとに、未だかつて、感嘆敬称ならざるなり。因って『人心これ危し』の語を移し得て、以って自戒し、かつ和歌一首を賦す。」歌に云う「郭公(ほととぎす) 声待ちかねて つひに将 月をも恨む 人心哉」

『人心これ危し』(人の心というものは弱くもろい。欲によって左右され、一本芯の通った生き方はしにくいものだ。しかし、心を純粹に保ち、その中に真理を見抜いて行動するのだと)。そういえば我が高校(佐賀ではないけれど)の校是は至誠至純であったなあ。江藤新平の銅像を見上げ、我ただただ自省自戒するのみ。



(編集委員長：三倉 剛)

あ と が き

地図の話

中学生の頃、教材で配られた国土地理院の1/25000地図との出会いが、地図にのめり込むきっかけでした。この地図も今では国土地理院のウェブサイトです。簡単に閲覧することができますが、当時は最も精密な地図でした。それに教科書の地図帳とは違い、自分が生活している周辺の地形や地名、道路、主要な建物など生活に関する情報がくまなく盛り込まれており情報の宝庫だったからです。ある場所の集落の成り立ちを昔の地図も参考にしながら想像を巡らすのは時間を忘れるほど楽しいと思うのですが、同好の士はあまり多くないようです。

今はインターネットの世界に色々な地図帳があります。Googleマップが有名ですが、これには航空写真（衛星写真）が付いていて地域によっては一軒一軒の家や道路を走る車まで識別できてしまいます。これを利用すれば見知らぬ土地がどのような場所なのかあらかじめ知ることができたり、昔過ごした思い出の場所が今はどうなっているかと訪ねてみたりすることも可能です。

地球規模ではGoogle Earthでしょう。これは無料でダウンロードできるアプリケーションで、インターネットを通じ世界中の衛星写真を見ることができます。軍事関連施設や地域によって解像度を悪くしている場所もありますが、かなりの解像度で北朝鮮や北方領土も見ることができます。また地域によってはストリートビューという機能を使うと、あたかもその地を歩いているように目線の高さで通りを見渡せます。

ところで今私はGoogle Earthを使って孤島巡りにはまっています。太平洋に浮かぶ絶海の孤島、寒風吹きすさぶ千島列島やアリューシャン列島を訪ね、示された地名を検索して日本との歴史的つながりやその地に関わった人々の思いを知ることができるのはまさにインターネットの時代ならではのでしょう。すでに多くの方がこのソフトを利用されていると思いますが、興味のある方は試してみてください。秋の夜長、ストリートビューでローマの町を散策するもよし、太平洋の孤島イースター島のモアイ像を訪ねるもよし。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

『空海の書』

平成22年7月3日の日経新聞（土曜日増刊）に『きれいなペン字を書く方法』というのが掲載された。要点は1. 右に6度強（時計の15分を水平とすると13～14分あたりに向かって）漢字の水平部分を右肩上がりにする。2. 平行する線は等間隔に。3. 右肩を上げるのと対照的に右下に向う部分は少し伸ばして重心をかける。この3点に注意すればきれいに字が書けるというものであった。

それから一年。最近『空海の書』を見る機会があった。一つは東京国立博物館での空海展。もう一つはNHKのBSプレミアムの番組で。初期の空海の書は、王羲之のそれを真似ているという。たしかに日経の記事のような書き方で丁寧かつ躍動感のあるものだった。まさしく書から意志・意欲というものが伝わってくる。

さて、畏友鳥孝行君が連載する『海岸通りの風』（大分県医師会報平成23年8月号）では主治医意見書の医師の手書き文字が見にくいという話題に触れている。王羲之、空海とまではいかななくても、丁寧な書き方に気をつけたいものだ。最近は文明の利器ワープロソフトに頼ることも多いが、己の意志意欲を表現するならば、手書き文字で。

空海の書の続きをお話して話を締めくくりたい。空海は王羲之に出発して、晩年は独自の境地を編み出し、なかば字体に創造・創意をこめて、絵画のような字を残している。それが仮名の発明につながったとも。右に掲載する絵手紙は、昔手術した患者さんから毎月送られてくるハガキの一つである。高次脳機能障害を克服しての創作活動を目にするたびに、空海晩年の書と同様、そこに一つの意志・意欲を感じるのである。もって見習うべしと自戒する日々である。



（編集委員長：三倉 剛）

あ と が き

雷騒動

それは数年前のある日の事でした。昼過ぎより激しい雨と雷が発生し、雷鳴が近づいているなどと思ったその時、凄まじい閃光と同時にバリバリドッカーンという大音響が。ふと診察室のパソコン画面に目をやると、真っ青な画面に無愛想な白い文字・・・おお、これはかの有名な(?)「ブルースクリーン」ではないか。ウィンドウズシステムはハードウェアの致命的なトラブルで制御不能に陥るとこのブルーの画面に警告文を表示します。後で調べた結果、パソコン本体(マザーボード)の電氣的破壊とハードディスクのデータ破壊が原因でした。おそらく落雷による過電流(雷サージ)か瞬停(瞬間的な停電)が原因だったのでしょう、その一撃で診察室のパソコンはあえなく絶命してしまっただけです。

当院が紙カルテで、レセコンが無傷だったのが不幸中の幸いでした。しかし検査データや心電図を保存するパソコンでもあったので代替機が稼働するようになるまでの数日間は外来診療がずいぶん停滞しました。しかもバックアップに保存していた一部を除いて多くの貴重なデータが一瞬で失われてしまいました。

それ以来、自分なりに停電対策と雷対策を行いましたが、専門家に言わせると市販品を用いた素人の対策は「気休め程度」なんだそうです。結局、雷に限らずアクシデント対策には複数台のパソコンに処理を分散させること、こまめにバックアップを取ること、以外に方法はないようです。

今、医療の多くのデータは電子化されつつあります。アクシデント対策はずいぶん施されているようですが、二重三重の対策を行っていたはずのあの原発でさえ「想定外の事態」で最悪の結果になりました。医療機関などの貴重なデータを全て電子化に託して大丈夫なのでしょう？他に方法がないのだけれど、電子化されたデータはいつか「想定外の事態」によって失う事もあるという覚悟くらいは必要かもしれません。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

医師人生も第4コーナーを回ってくると、今何ができるかということの他に、多少なりと社会に何を残せるかを考える。たとえば日本医師会生涯教育制度の中に、医師国家試験問題作成というのがある。貴方にも国試の問題作れますというわけである。別に国試でなくてもよいと思うが、次のようなことをつらつら考える毎日である。

若い頃英文雑誌に投稿して、貴方のケースは世界ですでに10例ほど報告済みですといわれてリジェクトされた頃は、この世界はノイエス（珍しい症例がノイエス）の世界だと勘違いしていた。症例報告の世界では確かにそうでしょう。しかし、実地臨床は目の前の一人がそのノイエス（スマップの唄のように、一例として同じ症例はない）だと、その日暮らしを続けるうちに感じ始めた。前回うまくいったとしても、次回も同じようにいくわけではない。経験は欺くのだ。ヒポクラテスの教えは今も生きている。

つたない経験を少しでも次世代に伝えること。医師 医師だけでなく、相手は医療スタッフであったり、患者さんであったり。それは教え、教えられの輪廻。そこから経験知を導き出して、余分をそぎ落とし、パールに近いものが残せられればいいな～と考える。（それでも前述したようにパールでさえ欺くかもしれない＝しかし、だからこそ、臨床はおもしろいのだ）。1000例経験するということは良医の必要条件たりえても、十分条件ではない。一例一例の違いを認識してこそ十分足りえる。どこぞの教室の退院時サマリーはその違い（一般例との違い）を明記することを旨としているらしい。そうすれば、長たらしいサマリーは、一行で核心を突くことになるのだ。なんと素晴らしいことか！

先日の林先生の講演を聞きながら、自分なりに同じように話できる事柄があるなあと思った。そんなに立派というほどでもないが、これだけは伝えたい、残したい。そんな医師数十年の経験が皆さんおありでしょう。私もそうした経験知を少しずつ貯める毎日である。近い将来、皆でこうした智慧（知恵だけではない）を持ち合って、次世代に伝えたい。それがわたしの夢である。

（編集委員長：三倉 剛）

あ と が き

以前のあとがきでも述べましたが、私は「詐欺（紛い）商法」に少し興味があって調べたことがあります。これは買い手の不安や欲望につけ込んで不当に金を巻き上げるという商法なのですが、色々なバリエーションもあります。ただ詐欺か合法かの境界が曖昧なケースもあるので、警察や国民生活センターでは明らかな詐欺あるいはそれに近いものもまとめて「悪質商法（または問題商法）」と呼んでいます。またメディアではむしろ「詐欺商法」とか「悪徳商法」という表現が一般的です。

悪質商法の基本は「～しないと～なる」（買わないと不幸になる）と「～すると～なる」（投資すると必ず儲かる）などというシンプルなロジックです。これに暴力、脅迫あるいは催眠のような方法を組み合わせています。私は特にこの催眠商法に興味があって、これまで被害者（多くは私の患者さんですが）に詳しく話を聞いてきました。別名マインド・コントロール商法とも呼ばれる催眠商法にも色々なバリエーションがあるのですが、代表的なものが集団催眠です。これは部屋に人々を集め、最初は無料で品物を配ったり器具を使わせることで次第に人々に暗示をかけ、結局商品を法外な値段で売りつけるという方法です。最近でも布団や健康器具の販売にこの手法が用いられていることがあります。売る側には言葉遣いやムード作りなどに独特のノウハウがあって、商品は変わっても彼らは基本的な部分あまり変えていません。また商法ではありませんが、似たような手法を政治活動や宗教活動で見ることもあります。

他にも多種多様な催眠商法があります。そして多くは判断能力の低下した高齢者をターゲットにしていますが、それが巧妙なため買い手が被害にあっている事に気づいていないという例も少なくないのです。日々の診療で患者さんからこのような話を聞いたときは、(独立行政法人) 国民生活センターにご相談されることをおすすめします。このホームページには色々な事例が掲載されているので参考になると思います。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

今回の東日本大震災をうけて、本屋に並んでいた、吉村 昭 著『三陸海岸大津波』（文春文庫）を読んでみた。著者は観賞する海ではなく、生活する海のある三陸海岸に、住民と同様の愛着を持っている。しかもその海は豊かな漁場であると同時に、恐ろしい“津波”という牙をむく海でもある。それは今も昔も変わらない。そうした場所になぜ人々は住み続けるのか？こうした人間の本性に迫った洞察抜きには、本当の復興はありえないであろう。ただ高台に家を造れでは解決策にならないということだ。本書の上梓は著者43歳、1970年である。残念ながら記録作家、吉村昭氏は2006年7月に逝去された。氏は以前一度宮崎医大で講演されたことがある。そのとき私は現場を重んじる歴史記録作家の話に聞き入ったものである。余談ではあるが、氏の作品としては、『破船』（新潮文庫）が最高傑作と思う。特に医療関係者に推薦したい作品である。

近代でこの三陸（陸奥・陸中・陸前）地方を襲った大津波は、明治29年6月（1896年）に発生した、明治三陸大津波（当時世界で二番目に大きな津波であった）と昭和8年3月3日（1933年）午前2時32分発生の地震に続く昭和三陸大津波である。くしくも前者は日清日露戦役の間にあり住民は当初ロシアの攻撃かと間違えたという話があり、一方後者は昭和恐慌・満州事変に東北冷害も加わって特にこの地方は沈んだ空気の中にあったという。昭和の復興としては今回同様、各町村内に急造のバラックが建てられ、住民は学校・寺院の避難所から移された。また家屋を失った世帯には、国有林の材木が無料支給された。それにより個人用住宅が続々建設された。また、明治期同様、今後津波の被害を受けないように住宅は高台に建設されることが要請された。しかし、この高所移転も、津波の記憶が薄れるに従い逆戻りする傾向が見られた。漁業者にとって高所移転は不便が多いためである。昭和8年三陸大津波以降の津波災害防止対策として防潮堤、防潮林、安全地帯への避難道路建設等が検討された。その結果としての田老町の10m防潮堤は有名。また『地震津波の心得』といったパンフレットが作製され、避難訓練が実施された。

『地震津波の心得』は参考になるので以下に上げておく。1. 緩慢な長い大揺れの地震があったら、津波が来る恐れがあるので少なくとも一時間くらいは辛抱して気をつけよ（というか早く高台に避難したほうがよい）。2. 遠雷あるいは大砲のごとき音がした場合は津波の来る恐れがある。3. 津波は激しい引き潮をもって始まるのを通例とするので潮の動きに注意。4. 避難時には家財に眼をくれず一目散に高台に逃げよ。5. もし船に乗って200～300m沖にいれば、さらに沖に逃げた方が安全である。（以上）

（編集委員長：三倉 剛）

あ と が き

津波が田畑や人家をなぎ倒して進む映像をリアルタイムに見た。逃げ惑う人や車を次々に飲み込んでいく黒い波。自然の災害に為す術もない、自然の巨大な力に言葉を失ってしまった。

「瓜生島」は別府湾に存在し、安土桃山時代に大地震で一日にして忽然と姿を消した島といわれている。ただ場所やその存在自体にも諸説あり、科学的調査が行われた現代に至ってもその結論は出ていない。一方、複数の古文書の中に別府湾の大分市付近に「沖ノ浜」なる集落があって、文禄5年（1596年）9月に別府湾を襲った大地震により壊滅し海に沈んだという記述があるそうだ。こちらは検証が進んでおり確からしいが、この沖ノ浜沈没が語り継がれていく過程で瓜生島伝説が作られたのではないかという説もある。いずれにしてもたかだか400年程度の昔に別府湾でも地震被害が存在したのは間違いないようである。

東日本大震災が1000年に一度の災害だといわれているが、大分県とて安心できない。現在、別大国道は着々と拡幅工事が進められているが地震や津波に対してどの程度持ちこたえられるのだろうか。大分県には豊の国ハイパーネットワーク構想があり、県内を網羅する光ファイバーネットワークが構築されつつある。その県南と県北をつなぐ幹線は、別大国道を通っているようだ。この道路が地震津波で寸断されれば、ハイパーネットワークは機能不全になるかもしれない。大災害が発生した場合、正確な情報の伝達がどれほど重要か、今回の震災で身に染みた。すべての災害を防ぐすべは無いが、最悪の事態だけは回避できるような対策が必要だ。『「安全に十分配慮しているので事故はあり得ない」という事はあり得ない』ということ、今回の津波被害や原発事故で我々は思い知らされた。医療の現場でも他山の石としたいが、あまりの犠牲に悲しみの方が大きい。被災された人々の心に一日も早く安らぎが訪れるよう祈らずにはいられない。

(編集副委員長：吉賀 攝)